

国際共修パイロット授業実践報告

村田 和代*

Report on a Pilot Class of Intercultural Collaborative Learning

Kazuyo MURATA*

This paper reports on a pilot class of Intercultural Collaborative Learning conducted in the first semester of the 2023 academic year. Intercultural Collaborative Learning, or ICL, aims to foster mutual understanding among students from different linguistic and cultural backgrounds through “meaningful interaction” in the form of collaborative learning experiences such as groupwork and projects. To promote the internal internationalization of the university and to nurture citizens with *magokoro* who can contribute to the happiness of others and will be responsible for a sustainable society, to develop ICL plays an important role in Ryukoku University.

1. はじめに

留学生交流の推進については『留学生 30 万人計画』（2009 年 文部科学省）の策定があげられる。これと時期を同じくして、大学の国際化を後押ししたのは、2009 年からスタートした国際化拠点整備事業『大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業』（2009～2013 年 文部科学省）や『スーパーグローバル大学創生支援事業』（2014～2023 年 文部科学省）であろう。国際化をキーワードに、質の高い大学教育・充実した留学生の受入れ体制を提供する大学の取組みのうち、特に優れたものを審査の結果、選定・採択し、国際化拠点の形成に向けて国が支援する事業である。日本の大学の国際競争力を高め、国際通用性を向上させることを目的として、徹底的な教育改革やガバナンス体制の構築をめざして取り組みが進められた。

大学の国際化を推進する一方で、2020 年年明けから始まった新型コロナウイルスによるパンデミックにより、長期にわたり海外との往来が厳しく制限されることとなった。ようやくコロナ禍も収束を迎え、ビジネスや観光を目的とした海外との往来も以前の活気を取り戻してきた。同様に、停滞していた留学生交流も元に戻りつつある。

このような状況下で、政府の「教育未来創造会議」¹⁾の第二次提言である「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ」（2023 年 4 月）が出された。提言では、留学生交流について新たな計画案が示された。人への投資を強化する一環として、10 年後までに、外国人留学生の受け入れを年間 40 万人（コロナ禍前 31.8 万人）に、海外に留学する日本人学生を年間 50 万人（コロナ禍前 22.2 万人）にすることを目指すというものである。

海外大学への留学を促進し、国際的に活躍できるグローバル人材を育成することは、大学の国際

* 龍谷大学政策学部教授

化を進めるために非常に重要である。一方、海外からの留学生の受け入れについてはどのような意義や目的があるのだろうか。上記会議と連携して実施された「戦略的な留学生交流の推進に関する検討会」のとりまとめ（2023年5月 文部科学省）において、外国人留学生受入れの意義・目的の一つとして大学の教育研究力の向上があげられている。その中で「学部段階における外国人留学生の存在は、日本人学生が多様性や異文化への理解や寛容性、ジレンマを克服して課題を解決する力や、協働を通じて新たな価値を創造する力を育むことに資するもの」（p.7）と位置付けられている。大学の国際化のためには、高等教育機関が「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」となる必要があり、「外国人留学生に特化した教育プログラムから脱却し、外国人留学生と日本人学生が共に学び、切磋琢磨する環境をつくること」（p.35）が肝要なのである。さらに、留学生交流を通して「大学を中核とした国際的に開かれた日本社会の実現」を目指すべきとし、下記のように述べている。

留学生交流は、高等教育機関内に留まらず、日本社会全体の変革をもたらす可能性に富む活動である。すなわち、留学生の存在が、大学主導で地方公共団体等の様々なステークホルダーを連携・協働させるきっかけとなり、大学を中心として日本社会へ変革をもたらすことや、多くの日本人が様々な国・地域からの外国人留学生との交流を通じて、多様な価値観、発想、習慣等に触れる機会を日常的に持つこと、留学後も引き続き日本国内において就職した留学生が活躍することなどにより、国際的に開かれた活力ある社会の実現が期待される。（p.7）

「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ」においても、留学生の卒業後の国内就職率を、現状の48%から60%を目指す計画であると明記されている。少子高齢化や労働力の減少という課題に直面している日本の地域社会の状況を鑑みても、職場や暮らしの中で、異なる言語・文化背景をもつ人々とともに活動する機会は、さらに増えていくだろう。

本稿では、現在、そしてこれからの大学教育で求められる「外国人留学生と日本人学生が共に学び、切磋琢磨する」場を創出する「国際共修」を紹介し、これを実施したパイロット授業について報告する。

2. 国際共修とは

国際共修（Intercultural Collaborative Learning）は、次のように定義されている。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチやコミュニケーションスタイルから学びあう。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につながる正課内外活動を国際共修とする。（末松 2109: iii）。

国際共修は、ただ単に同じ教室の中で学習者が机を並べ講義を聞いている状態を指すのではない。学習者同士がある共通の目標に向かう協働を通して、自ら多様性を受容しようとする姿勢を身に付け、自分自身の価値観がどのようなものであるかを見つめ直す能動的な学習機会を創出する場でなければならない。

国際共修をめぐる先行研究（青木・鄭 2023, 坂本ほか 2017, 末松ほか 2019 等）や国際学会ワークショップ²⁾、国内大学で国際共修に取り組む研究者への聞き取り調査³⁾から、国際共修の実施におけるポイントは、次の3点にまとめることができる。

(1) プロジェクトベース（Project/Problem-based Learning）であること

単に同じ教室で机を並べて講義を受けることは国際共修ではない。留学生と現地学生（local students）がチームを編成し話し合いを通してプロジェクトを進めていく（課題を解決していく）PBL である必要がある。

(2) トランスランゲージング（Translanguaging）の場の創出であること

国際共修は、必ずしも外国語学習を主たる目的とはしていない。授業自体はベース言語（提示する資料や教授言語は日本語ないしは英語が基本）があるものの、受講生同志のコミュニケーションは、翻訳ソフトを用いながらも、日本語と英語（あるいはほかの言語も）のミックスでも構わない。それぞれの学習者が持ちうる言語資源を駆使すること（トランスランゲージング）で、言語文化の異なる他者とのコミュニケーションを行うことができたという成功体験が重要なのである。

(3) 授業の目的を説明すること

授業の最初に、「国際共修」について説明し、バックグラウンドや意見や価値観の相違点を超えて新しい結論を導き出すことが目的であることを受講生にも説明することが重要である。

これら以外にも重要なポイントとして、教員の役割があげられる。教員は、新たな知識を教授するというよりも、ファシリテーターとして学習者中心の学びをサポートする立場であることが求められる。国内の先進事例では、国際共修の授業経験者が、ティーチングアシスタントとして授業デザインに関わったり、受講生の学びを助けるために授業補助に入ったりすることが多い。

3. 龍谷大学の現状とパイロット授業実施に至る経緯

2019 年度に、龍谷大学は将来計画としての「基本構想 400」を策定した（以下、構想 400）。構想 400 は、龍谷大学が創立 400 周年を迎える 2039 年度末までの 20 年間（2020 年度から推進）の時間軸で展開していく計画である。2039 年の具体的な将来ビジョンを『『まごころ～Magokoro～』ある市民を育み、新たな知と価値の創造を図ることで、あらゆる『壁』や『違い』を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる』と定めている。これを具現化するためには、重点戦略の一つとして掲げられているグローバル戦略をどのように展開するかが極めて重要な政策課題であると言える。

龍谷大学におけるグローバル戦略として策定されたのが“Ryukoku Gloval Vision 2023”である。

構想 400 に沿って、来たるべき多文化共生社会に備えて「多様性を受け入れ、外国人と共に生きていくことができる社会」に対応する人材育成のため、全学部が積極的に留学生を受け入れることを目指している。さらに、全学生数に対する留学生比率 5% 以上というグローバルスタンダードに必要な最低基準達成に向けた基盤形成を行い、次の 4 年（2027 年）、8 年（2031 年）での達成に繋げていく。そのうえで、数値目標を達成することだけにとらわれることなく、学生たちが異文化間対話を行えるような多様な機会（外国人留学生の受入・本学学生の派遣留学・国際共修科目開発）を創出し、龍谷大学らしい Magokoro ある地球市民を育むことで世界の平和に寄与することを国際支援部門の大きな目標としているのである。

国際共修に関しては「交換留学生を対象としたプログラム “Japanese Experience Program in Kyoto” のうち、日本語及び英語で開講されている日本事情科目、特別講義及び JEP-E 科目群を教養教育科目や学部専門科目のグローバル科目（仮称）として合併開講を目指す」という記載がある。しかし、現状では、交換留学生が履修できる学部専門科目のほとんどすべてが講義科目である。

2022 年度春に、筆者のゼミ生が、留学生とのワークショップを 2 回開催した。その中で留学生の悩みとして出されたのが、日本人学生の友達ができない、キャンパス内で交流する機会が少ない、キャンパス内で困っていても誰も話しかけてくれないといった日本人学生との交流の少なさや、日本人学生の留学生に対しての閉じられた態度に関することであった。

構想 400 で掲げる「『まごころ～Magokoro～』ある市民を育み、新たな知と価値の創造を図ることで、あらゆる『壁』や『違い』を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる」という将来ビジョンや、“Ryukoku Gloval Vision 2023” で掲げる「多様性を受け入れ、外国人と共に生きていくことができる社会」に対応する人材育成を具現化するためには、龍谷大学全体の「内なる国際化」が必要である。大学全体の「内なる国際化」には国際共修を行うことが有効である。これが、筆者のゼミ生の提案であった。

彼らは国際共修に取り組む研究者へのインタビューや文献調査をベースに 15 回分のシラバスを作成し、そこから抜粋した 5 回の短縮バージョンを、学生による実践として、2022 年秋に実施した。参加学生の変化についても分析し、国際共修の有効性を実証した（村田和代ゼミ 2022）。

彼らの調査や実践を踏まえて、国際共修の重要性をあらためて認識し、2023 年度国際共修のパイロット授業の実施に至ったのである。

4. 国際共修実践報告

本章では、2023 年度前期に実施した国際共修のパイロット授業について報告する。

4.1 授業概要

2023 年度前期、学部生・留学生と一緒に学ぶ「国際共修科目」のパイロット授業として、政策学部専攻科目「グローバル・コミュニケーション英語 A」と、交換留学生向けプログラムの JEP-E 科目 “Introductory Seminar A” を合併開講した。受講したのは政策学部の 18 人の学部生と 14 カ国 28 人の交換留学生である。

政策学部・JEP-Kyoto（交換留学生プログラム）合同の国際共修科目には、二つの大きな特徴が

ある。一つめは、到達目標が語学力の修得ではなく、様々な文化的背景を持つ他者を理解し柔軟に対応する異文化間能力の向上であることだ。講義は英語ベースで実施されたが、グループ内の議論はそれぞれの受講生が持つ言語資源を最大限活用して、英語と日本語のミックスやジェスチャーも駆使して行ってもいいし、翻訳ツールの活用も薦めた。二つめは、PBL 型授業であることだ。学部生と留学生は、①地域の小学生とのワークショップの開催、②深草西浦町で実施の夏祭りイベントでの模擬店出店、③龍谷大学のキャンパスツアー動画の制作といった3つのプロジェクトに分かれて、グループごとに活動してもらった。

表1は、実施した国際共修のパイロット授業のスケジュールである。

表1 2023年度前期国際共修パイロット授業と課題の内容

授業回	内容	授業後の課題
1回目	ループリック記入 イントロダクション グループに分かれて自己紹介 ① 名前、ニックネーム ② 出身地、 ③ 滞在中に何をしたいか／龍大のおすすめ ④ 日本滞在・留学中のトラブルや必要な（欲しい）情報／京都のおすすめ	授業で何を学んだかを記録
2回目	キャンパスツアー（留学生とペア）	授業で何を学んだかを記録
3回目	白地図に全員の出身地（国）を書く アイスブレイク「～と言えば」（それぞれの出身地の衣食住や価値観について共有するディスカッション）	授業で何を学んだかを記録
4回目	調整回	
5回目	出身地域のコロナ禍の状況やこれまでの対応についてディスカッション プロジェクト紹介	授業で何を学んだかを記録
6回目	グループプロジェクト1回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
7回目	グループプロジェクト2回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
8回目	グループプロジェクト3回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
9回目	グループプロジェクト4回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
10回目	グループプロジェクト5回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
11回目	グループプロジェクト6回目	グループディスカッションでのコミュニケーションの工夫について記録
(6月23日)	〈うずら児童館 ワークショップ①〉	
12回目	グループプロジェクト7回目	

(6月30日)	〈うずら児童館 ワークショップ②〉	
(7月1日)	〈夏祭り〉	
13回目	グループごとのふりかえり	ふりかえりの記録
14回目	自習（レポート執筆）	最終レポート：この授業全体を通して何を学んだか
15回目	動画発表会 ループリック記入 授業の総括	

1回目の授業では、まず受講生全員にループリックを配布した。これは、相互的文化能力（異文化間能力）の伸長度を評価するために、先進事例で開発中のものである（末松ほか 2022）⁴⁾。ループリックは、表2（p.132）で示しているように、知識・技能・態度に関してそれぞれ4項目から構成されており、それぞれの項目について、4段階のレベルを表す特徴がわかりやすい言葉で説明されている。受講生には授業開始前のレベルを4段階から自分自身で選んでもらった。その後、国際共修の定義や目的について、国内の国際共修のトップランナーである東北大学のウェブページを見せながら説明した。国際共修ではグループディスカッションやグループ活動を重視することや、グループ内では何語を使ってもいいし、翻訳アプリの使用も認めることを指示した。加えて、母語や第一言語で話す際には、そうでない人たちに配慮する必要があること、母語や第一言語話者同士で活動を進めてはならないという点も強調した。イントロダクションに続いて、6人程度の留学生・学部生の混合グループで、表1に示した4つの点についてお互い自己紹介をしてもらった。

国際共修は、教員から受講生への知識の教授というよりも、変容的学習を伴うアクティブラーニングであることから、毎回の授業のふりかえりを取り入れた。毎回の授業の最後に（あるいは授業後自宅で）ふりかえりの時間をとり、今日の授業で学んだこと、グループ内のコミュニケーションで工夫したこと、グループ活動で何がどこまで決まったか等を簡単に書いてもらった。

2回目、3回目の授業は、アイスブレイクの時間とした。2回目授業では、学部生と留学生とでペアを組んで、学部生がキャンパスを紹介するというキャンパスツアーを行った。3回目の授業では、教室の前に白地図を貼り、留学生が地図上のどこの出身であるかを全員で確認した。その後、6人程度のグループに分かれて、それぞれの出身地の衣食住や価値観を紹介しあうゲームを行った。

5回目には、コロナ禍の期間や対応が各国（地域）で異なることから、Covid-19をテーマにグループで年表を作成してもらった。授業の後半に、3つのプロジェクトを紹介し、どのプロジェクトに参加したいかを問うアンケートを実施した。

6回目から13回目は、プロジェクト毎（グループ毎）で進めてもらい、教員はグループ間を巡回して、進捗状況を確認めた。

3つのプロジェクトについて簡単に紹介しよう。1つめは地域の児童館（2か所の学童保育）と連携したワークショップの開催である。留学生と学部生がファシリテーターとなって、様々な言語や文字があることを紹介したり、留学生の出身国の子ども向けの遊びやダンスを、参加してくれた小学生に教えたりした。ワークショップの最後に、ワークショップの目的は、子どもたちに海外のことを知ってもらい、海外の人と交流することで多様性を知るきっかけにすることであると説明が

行われた。大学生のお姉さんたちから、「今日楽しかった人?」「海外に行ってみたい人?」「海外の人と遊んで嬉しかった人?」といった質問が投げかけられ、参加した小学生たち全員が「はい!」と嬉しそうに大きな声で返事していたのが印象的であった。ワークショップの準備では、意見や価値観の相違や、お互いの母語が異なることでうまく意思疎通できないこともあり、なかなか進まないときもあったが、チームで一つの活動ができたことは、チームメンバーにとってこの上ない達成感となったように見受けられた⁵⁾。

2つめのプロジェクトは、地域と連携した夏祭りイベントでの模擬店出店である。まず、留学生にとって夏祭りのイメージがわからなかったことや、模擬店出店のための準備資金（夏祭り後に返金）が必要であったことで留学生との間でトラブルを引き起こすことになった。地域との連携プロジェクトは、大学側の都合だけで進められるものではなく、克服すべき課題がいろいろあることを実感した。しかし、夏祭りイベントは大成功で、プロジェクトチームのメンバーだけでなく、近くに住む留学生たちが大勢夏祭りに参加し、非常に盛り上がった。加えて、地域の方々が日ごろ留学生と触れ合う機会がないということもあり、夏祭りでの交流を通して、あらためて多様な国からの留学生が地域に暮らしていることを実感し楽しかったと言っていた。これは、留学生にとっても教員にとっても嬉しい活動となった。

3つめのプロジェクトは、これから留学を考えている人向けに龍谷大学の紹介動画を作成するというものである。先に紹介したプロジェクトは参加人数が限られていたため、3つめのプロジェクトは、5チームに取り組んでもらうことになった。同じようなテーマの動画ではなく、それぞれの動画ごとにテーマ設定をしてもらう必要があることや、龍谷大学のほかの2つのキャンパスも紹介してもらいたいという希望を伝えたため、いくつかのチームにとっては、他キャンパスに移動する時間の確保が必要となり、負担をかけることとなった。できあがった5本の動画については、龍谷大学グローバル教育推進センターのスタッフにもいらしていただき、最終授業で動画発表会を開催した⁶⁾。

最終レポートとして、①この授業（国際共修）を通して何を学んだか、何か自分自身の中で変化があった場合は、どのような変化があったか、②来年度も国際共修を授業として展開する予定であるので、よい授業にするために、今年の授業を踏まえた体的なアドバイスは何か、③国際共修で取り組める具体的なプロジェクト案の3つの問いについて書いてもらった。

4.2 学習効果や実践を通した学びや変化

パイロット授業では、授業前後に、相互的文化能力（異文化間能力）の伸長度をみるために、先進事例で開発されたループリック（末松他 2022）を用い、自己評価してもらった。ループリックの項目は表2のとおりである。ループリックは、知識・技能・態度それぞれ4項目から構成されており、それぞれの項目について、4段階のレベルを表す特徴がわかりやすい言葉で説明されており、受講生にその時のレベルを自分自身で選んでもらった。

表2 ルーブリックの12項目

知識 (Knowledge)	
①	自己理解 (認識), 自己の偏見を克服する力
②	他者と自身の言語・コミュニケーションを取る姿勢の共通性・相違性を知る力
③	他者と自身の文化や行動様式の共通性・相違性を知る力
④	相互依存関係理解
スキル (Skill)	
⑤	言語・非言語コミュニケーション能力
⑥	異文化間能力, 傾聴力, 想像力, 自己開示
⑦	協働スキル, チームワーク, 主体的行動, 柔軟性, 問題解決能力
⑧	メタ認知力, 批判的思考力, 省察力
態度 (Attitude)	
⑨	違いへの興味・受容・共感の姿勢
⑩	積極的発信の姿勢
⑪	協働による建設的な問題解決の姿勢
⑫	他者とともに新しい視点や学びを生み出す態度

全受講生のルーブリックの授業前後の平均値を表したのが図1である。

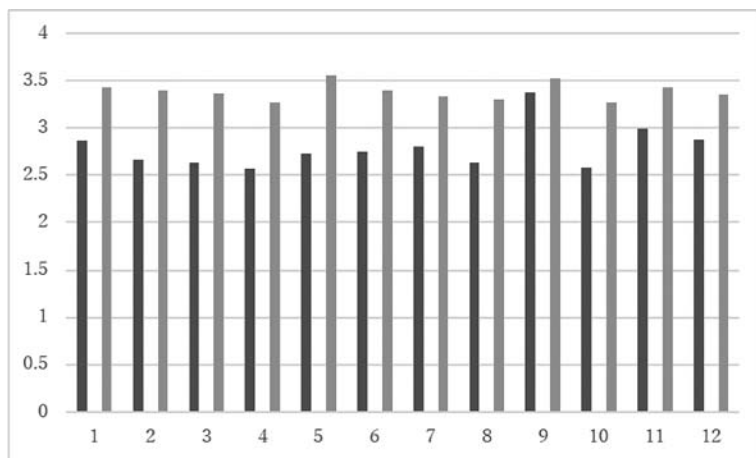


図1 パイロット授業全受講生のルーブリックの授業前後の平均値
※各項目の左側が授業前、右側が授業後の平均点を示す

図1のグラフが示すように、すべての項目で授業前より授業後のレベル（段階）がアップしていることがわかる。項目によっては伸長度の幅はあるものの、今回実施した国際共修により、相互的文化能力（異文化間能力）は上昇したと言えるだろう。

では、今回の国際共修パイロット授業を通して、具体的にどのような学びや変化があったのだろうか。最終レポートで複数の受講生から出された学びや変化をカテゴリー別に分類すると以下のよ

うにまとめられる。カテゴリー名の後に、受講生の文章を抜粋して紹介する。

【話そうとする姿勢や努力の重要性】〈日本人学生・留学生〉

「英語を完璧に話すことを重要視するのではなく、伝えようとする姿勢が大切であるということを学んだ。・・・簡単な英語を使用し、少し日本語も交えながらもお互いにコミュニケーションをとることが出来たためである。伝えたい姿勢を表すことで、相手は気持ちを汲み取ってくれるため、伝えようとする姿勢は大切であることを学んだ。」

“I had concerns about potential language barriers hindering our progress.... We made collective efforts to bridge the gaps in communication, finding innovative ways to express ourselves and understand one another. Whether it was using simple drawings, gestures, or breaking sentences into more accessible language chunks, we strived to ensure that nobody felt left out or misunderstood.”

“It’s about actively listening, being open to different interpretations, and embracing the diversity that everyone brings to the group.”

【異文化間の異なりや共通点を知ることができた】〈留学生・日本人学生〉

「留学生の議論の仕方に注目した。すると、留学生の議論の仕方は、相手に伝えようとする気持ちが日本人学生よりも強いと感じた。そう思えた理由が、人にもよるが、日本人学生よりも留学生の方が目を大きく見開いて相手の顔をしっかりと見て伝えていたと感じたからだ。また、ジェスチャーに関しても、顔を大きく振っていたことや、手を前に添えて説明をしていた。さらに、留学生の意見や行動に対する考え方に関しても、日本ではあまり考えられないユニークさが見られて他国の独特な文化や価値観に触れることができた。」

“In this class I learned a lot about how to work with others from different countries. Understanding the differences people have culturally towards each other and how they see things differently from one another is something that I didn’t really understand in my country.”

“These intercultural exchanges have been eye-opening, allowing us to gain insights into various aspects of life in different countries that we might have never encountered before.”

【成功体験からの学び】〈日本人学生・留学生〉

「何事も挑戦することを学んだ。出来ないとすぐに諦めるのではなく、挑戦することで出来るようになることもある。」

「言語の違う人と交わすコミュニケーションの楽しさを心から感じられた。大学卒業後は社会人として働き生活を営んでいくが、その過程でも今回の学びが活かせると考えている。国際共修は大学でのみ学ぶものではなく、社会に出て出会った様々な人と意見を交わすことでも学びを得られることでもあると考えるようになった。」

“As we persevered through the language obstacles, we discovered a deeper sense of unity among the team. Our differences in cultural backgrounds, perspectives, and experiences became sources of strength, enriching our discussions and problem-solving approaches.”

【留学生や観光客に積極的に話しかけるようになった】〈日本人学生〉

「何より、留学生や観光客の人には優しくしようと思えるようになった。・・・様々な国がある中でわざわざ日本を選んで自分の学生生活を日本で過ごそうとしてくれているのだ。困っておられる観光客にも話しかけるようになった。私が海外旅行に行ったら絶対困るだろうし、そんな中親切な人がいてくれたらとても嬉しく思うだろう。」

「英語で話すときはきれいな文法でなくても知っている単語を並べて伝えることを心掛け、Google翻訳やジェスチャーを使ってとにかく相手に伝わるように努力した。すると、案外英語が上手く話せなくても留学生に伝わることもできた。私はそれを知った瞬間留学生と会話をすることに楽しさを感じた。それから私は積極的に留学生とコミュニケーションを図るようになった。」

「外国人とコミュニケーションを取る事に抵抗が無くなった。アルバイト先にきた外国人への対応が受ける前の自分よりも、積極的に話すことができ、対応出来るようになった。」

【語学を学びたいという意欲】〈日本人学生〉

「もっと英語が分かりたい、話したい、聞き取りたいと思えた。〈中略〉翻訳機を使ってコミュニケーションをとるより英語をもっと勉強して直接話せるようになりたいと思った。」

「将来、外国人と様々な場面でコミュニケーションを取ってみたいと考えた。だから、今よりも円滑に外国人とコミュニケーションをするために語学学習に励みたいと思った。」

【日本語の上達】〈留学生〉

“I have more opportunity to practicing Japanese speaking; I felt my Japanese speaking ability is much better than the beginning of this semester.”

直接の学びとは言えないが、「留学生／日本人の友達ができ」「地域の人たち（子どもたち）との交流ができたことが嬉しかった」といった意見も多く受講生から見られた。加えて、大半の学生のレポートに、国際共修の授業を、龍谷大学のより多くの学生（留学生）たちにも体験してほしいという意見が記載されていた。

4.3 実践を通してみえてきた課題や次年度への提案

パイロット授業の実践を通して、筆者の視点から明らかになった課題、受講生からの提案は以下のようにまとめられる。

- 毎回授業の初めには、“Speak slowly” “Speak clearly” “Be kind” を繰り返し指示した。全員が英語の母語話者ではないことや、英語の到達レベルが個々人によってかなり異なることをじゅうぶん配慮するようということも意識して伝えた。しかしながら、グループディスカッションは、各自が持つ言語資源を駆使して行うように指導したが、留学生同士が英語で話したり、日本人学生が日本語で話しているという場面が見受けられた。
- 各プロジェクト（地域の小学生とのワークショップの開催や夏祭り企画）は、地域との連携による企画のため、授業の日時に合わせることはできない。グループによってプロジェクト開催日が

異なるため、全体としての進捗を合わせることは難しかった

- 1 グループの人数が多かった（6～8名）ので、留学生と日本人学生にわかれて話し合いが進められる場面が多かったし、フリーライダーが見受けられた。
- 3つのプロジェクトのうち、地域の人々と関われる2つは好意的に受け止められていたが、動画作成については取り組む時間が長すぎるという意見が多かった。
- 動画作成班はみんなで協力して何かをするというより、個人作業のようなものも多くなってしまったと思うので、工夫が必要だと思う。（受講生の記述より）
- 二人であれば必ず話さなければならないため、必ず喋る機会が与えられる。また、少数人数であるとかたくさん喋る分、早く仲を深めることが出来ると思う。よって、ペアワークなどを増やすことも良いと考える。（受講生の記述より）
- お互いの進捗状況を確認し合う中間報告会のようなものがあれば、コミュニケーションを取る良い機会にも、お互いの進捗を知る良い機会にもなったのではないかと考えた。（受講生の記述より）
- ニックネームを書いた名札をつけるようにしたらもっと話しやすくなると思う。（受講生の記述より）
- プロジェクトに従事する期間が長すぎた。小さなプロジェクトを短い期間で複数実施することで、多くの受講生とかわることが出来る。（受講生の記述より）

国際共修で取り組みたいプロジェクト（短期・長期とも）についても、受講生に最終レポートで具体的に書いてもらった。提案されたプロジェクトは以下のとおりである。

- 出身地の食べ物を持ち寄り／一緒に調理し紹介しあうプロジェクト
- 出身国の遊びを（例：日本の折り紙）体験を交えて紹介しあうプロジェクト
- 留学生と学生で職場体験先を話し合って決めて、先方へのアポイントも学生のみで取る。写真や動画なども職場体験中に撮らせていただいて、感想等も含めてプレゼンテーションをする職場体験プロジェクト
- 龍谷大学のPR動画（コマーシャル動画）の作成
- 観光地にフィールドワークに行き、気づきや発見、改善点について（留学生の出身国・地域の観光地とも比較しながら）パワーポイントを作成し発表するプロジェクト
- 共通の社会問題（気候変動問題やSDGsに関連するトピック）についての議論をし、その結果をパワーポイントにまとめ発表するプロジェクト
- ディベート大会
- 高齢者施設との交流プロジェクト
- 環境に対する意識を高めたり、コミュニティへの帰属意識を持つきっかけとなる公園や観光地の清掃をするプロジェクト

5. 今後に向けて

本稿では、コロナ禍後の日本の留学生交流の計画について概観し、受け入れ留学生と日本人学生

が協働し、異文化理解の場を作り、グローバル化が進む社会に対応するための力を養う場の必要性を論じた。続いて、これを具現化する国際共修を紹介し、龍谷大学の状況やパイロット授業に至る経緯を説明した。後半では、今年度前期に実施した国際共修のパイロット授業について報告した。受講生の学びや、今後に向けての具体的な課題も明確になり、これらを来年度以降の授業デザインや、実施・運営体制の構築につなげたい。今年度の国際共修パイロット授業は政策学部向けの科目であったが、政策学部以外の学生も履修できるような科目になれば、より多くの学生が留学生と交流する機会を持てるようになると思う。学生同士の交流だけではない。今回のパイロット授業で実施したワークショップでは地域の子どもと、夏祭りイベントでは地域の人たちと留学生・学部生が交流した。こうした出会いやふれあいが外国人への社会の受容に繋がることも期待できる。国籍や言語を越えて相手を思い、学び合う・助け合う、共生社会の実現に国際共修科目の果たす役割は大きいと考えている。

今般龍谷 IP 事業 (Ryukoku Inventive Program) の萌芽型プロジェクトとして『『国際共修科目』の設置に向けた調査および FD の展開－本学の教学ブランド化と『Magokoro ある地球市民』の育成に向けて』が採択された。龍谷大学における「国際共修」のこれからの展開、そしてそれを通した龍谷大学の「内なる国際化」に期待したい。そして、もちろん、筆者も微力ながら貢献できれば幸甚である。

注

- 1) 「教育未来創造会議」は、「我が国の未来を担う人材を育成するためには、高等教育をはじめとする教育の在り方について、国としての方向性を明確にするとともに、誰もが生涯にわたって学び続け学び直しができるよう、教育と社会との接続の多様化・柔軟化を推進する」ために設置された会議である。2021 年 12 月より 6 回開催された。詳細は、<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/index.html>
- 2) 「国際教育夏季研究大会」(2022 年 8 月 26 日、関西大学で開催) の「学生と共に創る、魅力ある『国際共修』」ワークショップに筆者ゼミ生とともに参加し、国際共修担当教員や国際担当の事務職員らと活発な意見交換を行った。
- 3) 筆者ゼミ生が開き手となって、末松和子先生 (東北大学 総長特別補佐 (国際交流担当)、高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター副センター長) (2022 年 7 月 25 日)、北出慶子先生 (立命館大学 文学部教授) (2022 年 7 月 28 日)、林雅子先生 (東北大学 言語文化教育センター准教授) (2022 年 8 月 5 日) に国際共修についてのインタビューを行った。
- 4) 開発中のルーブリックの活用をお認めいただいた末松和子教授に感謝申し上げます。
- 5) 2 回のワークショップの様子は、一部受講生に執筆してもらい龍谷大学政策学部ウェブサイトのニュースに掲載した。<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-12946.html>, <https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-13065.html>
- 6) 動画発表会は、龍谷大学政策学部ウェブサイトのニュースに掲載した。<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-13195.html>

参考文献

- 青木麻衣子・鄭 恵先 (編) (2023) 『国際共修授業－多様性を育む大学教育のプラン』明石書店。
- Li Wei. (2018) Translanguaging as a Practical Theory of Language. *Applied Linguistics* 39(1) : pp.9-30.
- 村田和代ゼミ (2022) 「Internationalization at Home－内なる国際化を龍谷大学から－」『龍谷大学政策学部討論会レジュメ』。
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子 (編) (2017) 『多文化間共修－多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社。
- 嶋津百代・熊谷由理 (2022) 「日米大学生のテレコラボレーションにみるレジリエンス－ことばの資源の戦略的使用と距離感の交渉」村田和代 (編) 『レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育』

pp.101-118. ひつじ書房

末松和子（2019）「はじめに」末松和子・秋庭裕子・米沢由香子（編）『国際共修－文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂. pp.i-vi.

末松和子・秋庭裕子・米沢由香子（編）（2019）『国際共修－文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.

末松和子・北出慶子・村田晶子・尾中夏美・高橋美能・秋庭裕子（2022）「国際共修ルーブリック－開発とそのプロセス－」異文化間教育学会 第43回大会（立命館大学衣笠キャンパス），2022年6月11日.